

# ストラテジーで学ぶ日本語学習番組 「ひきだすにほんご Activate Your Japanese!」の 開発とその反響

菊岡由夏・石山友之・本田雅美

[キーワード] ストラテジー (方略)、CEFR、JF 日本語教育スタンダード、B1、特定技能

## [要 旨]

本稿では、2022年に公開された「ひきだすにほんご Activate Your Japanese!」について、メインコーナーの「スアン日本へ行く!」を中心に、その開発の背景と設計、活用を通して得られた反響について論じる。「スアン日本へ行く!」はストラテジー (方略) を学習項目としたところに特徴がある。ストラテジーは、CEFR の考え方を参照して定義し、ストラテジーの選定も CEFR のストラテジーの能力記述文に基づいて行った。また、コンテンツは、視聴を通して、課題の認識、課題を乗り越えるためのストラテジーの検討、実行という、CEFR の考え方に基づいたストラテジー使用の一連の流れが理解できるように構成されている。その他、2つのサブコーナー「気持ちが伝わるオノマトペ」「津々浦々日本のセンパイ」についても開発の概要を論じる。

## 1. はじめに

「ひきだすにほんご Activate Your Japanese!」(以下、「ひきだすにほんご」)は、国際交流基金日本語国際センターとNHK エデュケーション (以下、NED) が共同で制作した日本語学習番組である。ドラマ「スアン日本へ行く! Xuan Tackles Japan!」(以下「スアン日本へ行く!」)、ミニコーナー「気持ちが伝わるオノマトペ ONOMATOPOEIA -Share Feelings-」(以下「気持ちが伝わるオノマトペ」)、ドキュメンタリー「津々浦々日本のセンパイ Welcome to My Japan!」(以下「津々浦々日本のセンパイ」)の3コーナー構成の15分番組で、2022年2月からNHKワールドJAPAN (以下、NHKワールド) で放送が開始された。現在も隔週で放送され、NHKワールドのwebサイト<sup>(1)</sup>でも視聴が可能である。また、2023年3月には、国際交流基金が「ひきだすにほんご Activate Your Japanese!コンテンツライブラリー」(以下、コンテンツライブラリー<sup>(2)</sup>)を公開し、コーナーごとのコンテンツ視聴が可能になるなど、個人での番組視聴や自習に限らず、日本語の授業のための教材としても活用しやすいよう展開している。



図1 「ひきだすにほんご」のロゴ画像



図2 コンテンツライブラリー Top 画面

「ひきだすにほんご」は、メインコーナーであるドラマ「スアン日本へ行く！」で日本語でのコミュニケーションに必要な「ストラテジー（方略）<sup>(3)</sup>」を学習項目として取り上げている点に特徴がある。本稿では、「スアン日本へ行く！」を中心に、「ひきだすにほんご」の開発の背景と設計について報告するとともに、公開後の反響と今後の展開について論じる。

## 2. 開発の背景とストラテジー

### 2.1 開発の背景

本コンテンツの開発については、2020年4月から2022年3月末までの2年間のプロジェクトとして行われた。日本語教育領域では、2018年に可決、成立した改正出入国管理法により創設された在留資格「特定技能」を契機の一つとして、就労を目的に来日する外国人への日本語教育が重視されるようになった<sup>(4)</sup>。国際交流基金でも、「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」<sup>(5)</sup>に則り、翌2019年から特定技能外国人材向けの日本語事業を開始した。「国際交流基金日本語基礎テスト（JFT-Basic）の実施」「JF生活日本語 Can-do・教材等の開発、普及」「現地日本語教師育成」「現地日本語教育活動強化支援」の4つの柱（図3）を中心に「特定技能」外国人材向けの日本語事業に取り組んでいる。



図3 特定技能制度関連日本語事業の4つの柱

開発者らが所属する日本語国際センターでは、日本語を母語としない外国人が、日本での生活場面で求められる基礎的な日本語コミュニケーション力を示した JF 生活日本語 Can-do<sup>(6)</sup>を

ストラテジーで学ぶ日本語学習番組「ひきだすにほんご Activate Your Japanese!」の開発とその反響

開発し2019年8月に公開したほか、JF 生活日本語 Can-do に基づいた日本語コースブック『いもどり 生活の日本語』『入門 (A1)』『初級1 (A2)』『初級2 (A2)』を開発した<sup>(7)</sup>。また、2019年度より特定技能制度による来日を希望する学習者に対して現地で日本語を教える教師たちを対象とする日本語教授法の研修を開始するなど、その支援に努めている。これらの取り組みはいずれも、在留資格「特定技能」の取得で求められる日本語力、「ある程度日常会話ができ、生活に支障がない程度」の目安である JF 日本語教育スタンダード (以下、JF スタンダード) A2 レベルまでの日本語を対象としたものである。

「ひきだすにほんご」はこのような日本語教育の潮流、および、国際交流基金の日本語教育事業の展開を背景に、特定技能関連事業で開発した教材を学び終えた学習者が、さらに実践的なコミュニケーション能力をつけるために役立つ教材と位置付けて開発することとした。

## 2.2 ストラテジー

コンテンツの開発にあたり、ストラテジーを「コミュニケーションの目的をうまく達成するために、自分が使える能力や周りのリソースを活かす工夫」と定義した。これは、国際交流基金の日本語教育の考え方を示した JF スタンダードが、その開発の基盤とした Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (Council of Europe, 2001) (以下、CEFR) および、その補遺版として2020年に発表された CEFR の Companion Volume (Council of Europe, 2020) (以下、CEFR CV) のストラテジーの考え方をもとにした。

「JF スタンダードの木 (国際交流基金 2017:10)」で示されているように、ストラテジー (図4では「方略」と記載) はコミュニケーション言語活動の欠かせない構成要素の一つで、木の枝葉で示されるコミュニケーション言語活動の枝分かれ部分に位置し、木の根で示されるコミュニケーション言語能力に続いている。これは、ストラテジーが、コミュニケーション言語活動において、コミュニケーション言語能力を有効に活用するよう働きかける役割、すなわち、「コミュニケーション言語活動とコミュニケーション言語能力をつなぐ役割を担っている (Council of Europe, 2020:35)<sup>(8)</sup>」ことを示していると考えられる。

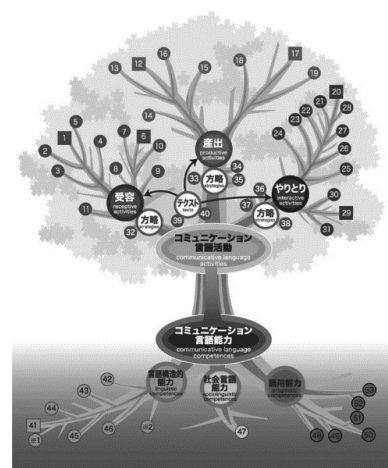


図4 JF スタンダードの木

CEFR では、ストラテジーを、受容 (reception)、産出 (production)、やりとり (interaction)、仲介 (mediation) の各コミュニケーション言語活動における、事前計画 (Pre-planning)、実行 (Execution)、モニタリング (Monitoring)、修正行動 (Repair Action) (Council of Europe,

2001:57) であり、コミュニケーション行動の効果を最大限にするためにとられる一連の行動(同上)と説明されている。

つまり、コミュニケーションにおける実践的な「行動」として位置付けられながらも、同時に自らの行動を客観的に観察しながら、次の行動を計画し、実行、モニタリング、修正するといったメタ認知の原理を用いた (the application of the metacognitive principles (同上)) 内面的な「思考」を伴うものとして捉えられている点に特徴がある。North (2000:74) は、CEFR の能力モデル (competence model) が Canale & Swain、van Ek、Bachman のモデルを出発点としながらも、ストラテジー能力については、特に Bachman (1990) の考え方を重視している。そして、North (2000:78) では、ストラテジー能力を Canale & Swain (1980) が言語能力の一部としたのとは異なり、一般的能力であると捉え、熟達度の一側面としてより広義に解釈するとよいと述べている。

CEFR の考え方に従えば、ストラテジーは、コミュニケーションで生じた困難を乗り越えるためのノウハウや知識の集積に留まるのではなく、ノウハウや知識を目的に即して有効に活用するための内的思考を含めた行動であると言える。言い換えると、ストラテジーとは、コミュニケーション言語活動の目的を意識し、そこでの行為を自分自身で観察し、その効果を最大限にするよう、自分の持つ言語能力や一般的能力、周りのリソースをどう活用するか計画し、それを実行するという自立的な思考と行動を指すと言える。本章の冒頭で、本コンテンツ開発におけるストラテジーの定義を「コミュニケーションの目的をうまく達成するために、自分が使える能力や周りのリソースを活かす工夫」と述べたが、この「工夫」という言葉には、CEFR のストラテジーに見られる「思考」と「行動」の両方を含んでいる。

CEFR における B レベルの話者は「自立した言語話者 (Independent User)」とされ、「個人」、「家族」、「日常生活」などの直接関係がある身近な領域での言語使用に限られる A2 レベルと比較して、B1 レベルでは「仕事」、「学校」、「娯楽」などの関心領域へと拡大し、予測不可能な状況においてもその状況を解釈し、そこで求められる課題にどう対応するかを判断し、行動するといった自立性が求められる。このような想定外の事態に自立的に対処するには、A2 レベルと比較して相当の「工夫」が必要になると言える。そこで、開発者らは B1 レベルの話者として自立的に言語を使用していくために有益な「工夫」の一つにストラテジーがあると考えた。

### 3. 「ひきだすにほんご」の開発方針と基本設計

#### 3.1 開発方針

2.1で述べた開発背景に鑑み、「ひきだすにほんご」の主なターゲットを、「日本での生活や就労を希望する外国人」とした。そのうえで、本コンテンツの開発にあたり、以下の3つの方

針を立てた。

- 1) 継続して視聴するモチベーションにつながるよう見て楽しめるコンテンツとすること
- 2) コミュニケーション能力の向上だけでなく、社会、文化についても学べるものにする
- 3) 日本語学習者だけでなく、日本語母語話者にとっても見る価値のあるものにする

本コンテンツは日本語学習番組という性質上、番組としての視聴や自習教材としての活用が第一となる。そのため、本コンテンツを継続して視聴したくなるような、モチベーションに働きかける仕組みが必要だと考えた。また、企画段階から全世界での放送が想定されていたため、日本での生活や就労を希望する人々だけではなく、広く日本の社会や文化を知りたいと考える人々にも資するコンテンツとなるよう配慮した。さらに、外国人の日本での生活や就労には、その人たちを受け入れる受け入れ側の人々の意識も重要だと考え、受け入れ側の人々への働きかけにつながるよう配慮した。

### 3.2 対象レベル

主な対象レベルは、JF スタンドアードの A2 から B1 レベルとした。これは、特定技能関連事業で扱う日本語教材が A2 レベルまでであること、また、本コンテンツを特定技能関連事業で開発された教材を学び終えた学習者が、さらに実践的なコミュニケーション能力をつけるための教材と位置付けたことを踏まえて決めた。なお、「スアン日本へ行く！」の主たる学習項目にストラテジーを選んだのは、2.2で述べたとおり、ストラテジーが B レベルで求められるコミュニケーション言語活動における自立的な行動に不可欠なものであり、特に A2 から B1 レベルへの橋渡しとして、その意識化や活性化が重要だと考えたためである。

### 3.3 コーナー構成

「ひきだすにほんご」は1ユニット15分、全24回で構成されている。また、一つのユニットは、表1に示した3つのコーナーで構成されている。ただし、NHKワールド放送版では、第1回と24回はそれぞれ、ドラマとドキュメンタリー、ドラマとミニコーナーの2コーナー構成となっている<sup>9)</sup>。

表1 「ひきだすにほんご」のコーナー構成

コーナー	タイトル	時間
ドラマ	スアン日本へ行く！ Xuan Tackles Japan!	約9分
ミニコーナー	気持ちが伝わるオノマトペ ONOMATOPOEIA -Share Feelings-	約1分
ドキュメンタリー	津々浦々日本のセンパイ Welcome to My Japan!	約5分

## 4. 各コンテンツの詳細

### 4.1 ドラマ「スアン日本へ行く！」

#### 4.1.1 概要

「スアン日本へ行く！」はドラマ形式のコンテンツで、「ひきだすにほんご」のメインコーナーである。ドラマのストーリーは、日本のホテルで働くために来日した「スアン」が、日々の仕事や生活の中で出合うコミュニケーションの課題を、ストラテジーを使って乗り越え、成長していく姿を描いている。3.1で提示した方針にもあるように、楽しんで視聴を続けられるよう、ドラマとしても完成度の高いものになっている。



図5 「スアン日本へ行く！」のオープニング画像と登場人物一覧

主人公のスアンはベトナム出身の設定である。近年日本で就労する外国人の中でベトナム国籍の人が増えていることがこの設定を選択した最たる理由である。また、スアンを取り巻く仲間として、ブラジル（役名 モニカ）、インドネシア（役名 ダニー）、トルコ（役名 カーン）出身の登場人物を設定した。可能な限りバラエティに富んだ設定にすることで、日本国内を見渡したときに、身近にいる外国人としてイメージしやすいことを目指した。日本人の登場人物は、新しい仲間の受け入れに前向きな上司（太田）、関西弁を話す先輩（すみれ）、コミュニケーション下手な青年（麗）、少し気難しい地域の老人（佐々木）、比較的年齢の近い親切的な友人（葵）など、日本で働く外国人が会いそうな人々や、出会ってほしい人々をイメージして設定した。

#### 4.1.2 ストラテジーの選定

ストラテジーの選定はCEFR CVの各言語活動に属するストラテジーの能力記述文に基づいて行った。CEFRのストラテジーの能力記述文をリストアップし、それらを特定技能等で来日する人たちに日本語を教える日本語教師へのヒアリングで得られたコミュニケーション課題（菊岡ほか 2021）を参考に、ストラテジーの具体的な使用場面をスキット形式にまとめた。まとめられたスキットをもとにコンテンツで取り上げるストラテジーを選択したが、その際、日本語学習者が日本で生活するにあたって出合いそうな場面を想定し、複数の日本語の教科書

やコミュニケーション・ストラテジーに関する研究、実践論文（李 2006、椿 2010、藤長・斎藤 2015等）を参考に、ドラマのストーリー展開も考慮しつつ、日本語学習者にとって身近で有用性が高いと考えられるものを選択した<sup>(10)</sup>。また、本コンテンツでは、日本での生活において口頭によるコミュニケーションの機会が多いこと、ドラマの形式に合うコミュニケーションモードの選択の必要性を考慮し、受容の言語活動に付随するストラテジー、および書くことに関するストラテジーは取り上げず、口頭コミュニケーションにおけるストラテジーに特化することとした。

CEFR CV では、ストラテジーの能力記述文は言語活動ごとに表 2 のようにカテゴリー分けされている。グレー掛けの箇所は本コンテンツで取り上げなかったカテゴリーで、カテゴリー名の後に続く（ ）書きの数字はコンテンツで取り上げたそのカテゴリーに属するストラテジーの数を示す。

表 2 ストラテジーの能力記述文カテゴリー一覧<sup>(11)</sup>

受容	産出	やりとり	仲介	
			新概念の説明	テキストの簡略化
意図を推測する	表現方法を考える (2)	発言権を取る(ター ン・テイキング) (7)	既知の知識に 関連付ける (1)	わかりにくいテク ストを説明する (1)
	他の方法で補う(表 現できないことを) (2)	議論の展開に 協力する (4)	言語を調整する	テキストを 効率化する
	自分の発話を モニターする (2)	説明を求める (3)	複雑な情報を 分解する (2)	

口頭でのコミュニケーションで用いるストラテジーに該当するカテゴリーは、できるだけ網羅するよう努めたが、仲介の言語活動については、カテゴリーが5つと多いこと、口頭コミュニケーションで用いるストラテジーの具体例が挙げにくいものがあり、すべてのカテゴリーからストラテジーを選定することはできなかった。また、やりとりの言語活動に付随する「発言権を取る (ターン・テイキング)」は、会話の開始、継続、終了の一連の行動に関わることから、最も多くのストラテジーを取り上げている。

なお、選定したストラテジーをドラマのシナリオへと落とし込む作業は初めに NED 側の脚本家が行い、それらを NED と日本語国際センターの制作担当者が、映像制作の観点と、ストラテジー使用が的確に反映されているか、言語表現は適当かつ、設定レベルから逸脱していないか等の教材制作の観点の双方から検討し、修正を加えながら作成した。

#### 4.1.3 1話の流れ

コーナーは全体がおおむね約9分前後で構成されており、そのうち約8分がドラマ、残りの1～2分弱がストラテジーの解説に充てられている。各話で1つのストラテジーを扱っており、ドラマの中では図6のような流れでスアンのストラテジー使用を見せていく。

第1話「夢への第一歩」を例に、「スアン日本へ行く！」の流れを紹介する。第1話は来日直後の迎えの車の中で、話が続き気まづくなってしまうスアンが、「質問をして相手に話してもらおう」というストラテジーを使って、話を続けようとする回である。「質問をして相手に話してもらおう」というストラテジーは、やりとりの継続に関わるもので、表2で示したカテゴリーのうち、やりとりの言語活動の「発言権を取る（ターン・テイキング）」に属する。

空港にスアンを迎えに来たホテルのマネージャー太田が、スアンをリラックスさせようと話しかけてくれるところから、車内での雑談が始まる（①コミュニケーションの開始）。ところが、日本語に不慣れたスアンは太田の質問に対して、ごく短く回答するばかりであることから、太田はスアンとの会話の糸口がつかめず、話しかけるのをやめてしまう。スアンは太田と話したいと思いつつも、何を話せばよいのかわからず、太田との会話を続けることをあきらめて寝たふりをしようとする（②コミュニケーション課題の認識）。そこに、スアンが空港で偶然会った少年から手渡されたキーホルダーが実在化したキャラクター「やんす」が現れ、スアンとともに②の課題を乗り越えるためのストラテジーを検討する（③ストラテジーの検討）。最後に、③で考えたストラテジーを実際に使うことでコミュニケーションの目的、ここでは太田とのおしゃべりを続けることに成功する（④ストラテジーの実行）。



図6 「スアン日本へ行く！」の流れ

このように、スアンを中心にドラマを見ていくことで、スアンとともに課題を認識し、それを乗り越えるためのストラテジーを考え、そしてそのストラテジーを使用するという一連の行動をイメージすることができるよう構成されている。なお、本コーナーは各エピソードで1つのストラテジーを学べるようになっており、1つのエピソードを単体で使用することも可能である。



#### 4.1.4 大切にしていること

本番組を日本語学習に活用してもらうにあたり、以下のことを視聴者に伝えられるよう作成の際、留意した。それは、スアンがストラテジーを用いる様子を客観的に見るだけでなく、スアンの目線になり、自分も同じ課題に出合ったことはないか、もしスアンと同じような場面に出合った場合、自分だったらどのような対応をとるか（何と云うか）、といったことを考える、言い換えると、自分事として考える機会が大切だということである。こうすることにより、ストラテジーが有効な場面やそこで使える言語リソースをノウハウとして学ぶだけでなく、自分のコミュニケーション行動をふり返り、コミュニケーションの目的に沿って、どう対応するかを考える「ストラテジー能力（Bachman, 1990）」が育成されると考える。教室活動で視聴する場合は、教師が考える機会を提供することができる。また、個人で番組を視聴する人にも可能な限り、考える機会を提供できるよう、番組冒頭には図7のような画面が挿入されている。

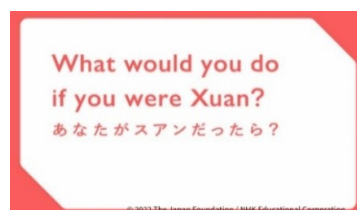


図7 番組冒頭の画面

#### 4.1.5 「やんす」の役割

スアンがストラテジーを考える場面で必ず登場するキャラクターが「やんす」(図8)である。第1話で、機内で乗り合わせた見知らぬ少年から手渡されるキーホルダーで、スアンがコミュニケーションの課題に出会うと実体化して、コミュニケーションの継続をあきらめようとするスアンを励ましたり、問いかけたりして、スアンと一緒に課題を乗り越える方法を考える。



図8 やんす

やんすとの対話は、スアンが「一人ではできなかったこと」に対して自覚的に向き合い、それを明示化し、乗り越える方法を考え、自らに取り込んでいく過程を可視化する機能を果たす。これはヴィゴツキー（2001）の論じた最近接発達の領域（Zone of the Proximal Development、以下ZPD）の考えを取り入れたものである。第二言語習得研究にZPDの概念を応用したLantolf, Poehner & Thorne（2020）はZPDを、他者との支援的協働の中で言語を使用できる段階と、自らが自立的かつ自覚的に使用できる段階との差と位置付けている。つまり、あることばを学習者が一人で制御できるようになるには、他者との協働を通じ、そのことばを介した行動ができる段階を経るのであり、やんすとの対話は、スアンが自らの行動を一人で制御する成長に至らせるための助走のプロセスとして捉えることができる。言い換えると、やんすはスアンの成長の過程において、スアンに寄り添い、問いかけ、声援を送り、時にリードをしながら実践を共有する「伴走者」の役割を担う。伴走者は同じランナーでありながら、主役のランナーの力を最大限にひきだす存在である。

#### 4.1.6 解説パート

ドラマの最後には、やんすによる1～2分のストラテジー解説パートを設定している。解説パートでは、その話のストラテジー使用場面とそこで用いた言語表現、ストラテジーの効果についてごく簡潔に解説をしている。図9がその一場面である。なお、各話で取り上げられたストラテジーについてより詳しく知りたい人のために、コンテンツライブラリーにストラテジー解説を用意し、「関連コンテンツ」内の「ダウンロードコンテンツ一覧」からダウンロードできるようになっている。



図9 解説パート画像

## 4.2 ミニコーナー「気持ち伝わるオノマトペ」

### 4.2.1 オノマトペの選定

開発者らで過去のオノマトペの教材や辞書などを検討した結果、オノマトペの意味を解説したものが多く、意味を推測して理解するというプロセスや、実際のコミュニケーションの中でオノマトペをどう使うかという視点が不足していると考えた。そこで、コミュニケーションのためのオノマトペを取り上げることをこのコーナーの方針とした。

選定の手順としては、まず、気持ちや感覚の共有につながるようなオノマトペと、それが含まれる短い会話例と場面を書き出した。その後、日常会話で使われるか、使って楽しい気持ちになるか、そして、映像で意味や使い方をわかりやすく伝えることができるか、という観点で絞り込みを行った。その結果、基本的に各回に1つ、表3にあげたオノマトペが採用された。なお、第20、21回は「食べもの編」と題して、それぞれ4つのオノマトペを取り上げている<sup>(12)</sup>。

表3 気持ち伝わるオノマトペ一覧

1. すっきり	2. ほっとする	3. ばっちり	4. どきどき
5. ばたばた	6. ばらばら	7. ごろごろ	8. ぴったり
9. ぼーっとする	10. へとへと	11. すばっと	12. じーんとする

13. もやもや	14. そっと	15. ぱぱっと	16. どんどん
17. わくわく	18. ぶらぶら	19. きらきら	20. サクサク、とろーり等
21. もちもち、ぷるぷる等	22. ぎりぎり	23. こつこつ	24. うとうとする

#### 4.2.2 概要

「気持ちが伝わるオノマトペ」では、オノマトペを友人などとのコミュニケーションで活用し、オノマトペを通して気持ちや感覚を共有する喜びを体験してもらうことを目指した。



図10 気持ちが伝わるオノマトペの流れ

1分の短いコーナーであるが、その中で①オノマトペの意味を抽象的に示したイメージを提示し、②オノマトペを使用する複数の例を見せてオノマトペの意味の理解を促進し、最後に、③オノマトペを使ったコミュニケーション場面を会話形式で見せるという構成である（図10）。コーナーの中にはオノマトペの明示的な意味や使い方の解説はないが、シンプルでわかりやすいアニメーションや実写の会話スキットを通して、視聴者が無理なくオノマトペの意味を推測し、使い方が理解できるような作りになっている。図10で取り上げたのは、第3回で取り上げた「ぱっちり」の例である。③「オノマトペを使った会話」は、そのまま覚えて友人などのおしゃべりに活用してほしいと考え、「すぐに覚えられて、すぐに使える」ものを目指し、短く、わかりやすい場面設定を心掛けた。例えば「ぱっちり」は、写真が上手に撮れたか確認するという会話で、図11の通り非常に短い会話になっている。

A：とるよー せーの！  
B：どう？  
A：ぱっちりじゃない？  
B、C：うん ぱっちり！

図11 「ぱっちり」の会話例

### 4.3 ドキュメンタリー「津々浦々日本のセンパイ」

#### 4.3.1 「センパイ」の人選

このコーナーは、日本全国で働く外国人を「センパイ」と称し、その仕事ぶりや生活、そして、センパイが住む地域の風景や食文化などを紹介するドキュメンタリーである。センパイの人選は、出身地、日本国内の居住地、職種が可能な限りバラエティに富むようにした（表4）。

表4 津々浦々日本のセンパイ一覧

出身地	居住地	職種	出身地	居住地	職種
1. ミャンマー	沖縄	リゾートホテル勤務	13. 中国	岐阜	機械部品製造会社勤務
2. アメリカ	宮城	地域商社勤務	14. カンボジア	香川	農園勤務
3. ベトナム	岡山	金属部品工場勤務	15. ウクライナ	福井	和菓子職人
4. フィリピン	愛知	介護福祉士	16. スリランカ	千葉	自動車整備士
5. イラン	群馬	ベーカリー経営	17. ブラジル	富山	金属部品塗装会社勤務
6. マダガスカル	広島	食品加工機械メーカー勤務	18. モンゴル	滋賀	薬剤製造会社勤務
7. アルゼンチン	埼玉	レストラン経営	19. ネパール	佐賀	農園経営
8. バングラデシュ	長野	IT企業勤務	20. ミャンマー	大阪	プラスチック部品製造会社勤務
9. インドネシア	栃木	遊園地勤務	21. ベルギー	石川	塩職人
10. ベトナム	茨城	鉄筋工事会社勤務	22. フィリピン	静岡	自動車学校経営
11. ロシア	鳥取	国際経済交流団体勤務	23. マレーシア	青森	カフェ経営
12. 韓国	北海道	スキー場勤務	24. モルディブ	熊本	和食料理人

#### 4.3.2 概要

このコーナーは、開発の段階で、世界各地への配信と視聴しやすさ、日本語学習コンテンツとしての活用、日本語母語話者の視聴等を考慮し、英語ナレーション版と日本語ナレーション版の2種類を制作した。現在、NHK ワールドでは英語ナレーション版が放送されており、コンテンツライブラリーでは日本語ナレーション版を公開している。

「津々浦々日本のセンパイ」では、センパイたちの仕事ぶり、暮らしぶりを知ることができるほか、センパイたちの働く職場の上司や同僚、センパイたちを取り囲む周りの人たちの声を知ることができる。また、コーナーの最後にはセンパイたちの「好きな日本語」の紹介もあり、センパイたちの経験に裏付けされた実感のある日本語を学ぶことができる。図12に一場面を示した。

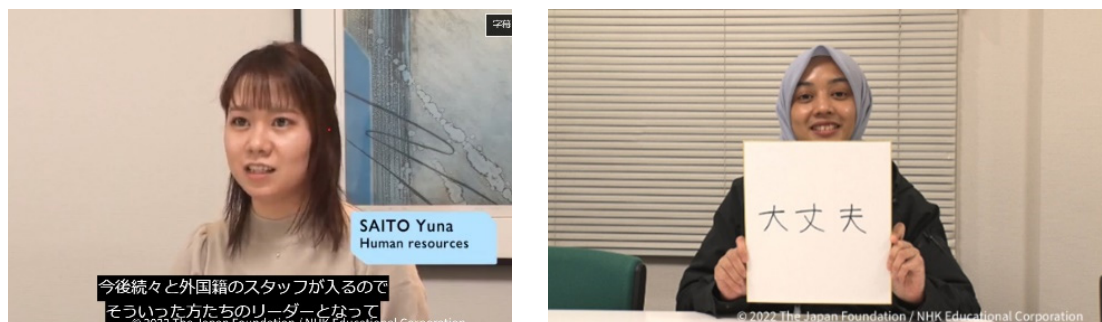


図12 「津々浦々日本のセンパイ」の一場面

## 5. 「ひきだすにほんご」の反響

2022年2月の番組公開後、さまざまな機関の授業やイベント等で「ひきだすにほんご」が取り上げられている<sup>(13)</sup>。国際交流基金日本語国際センターにおいても、海外の非母語話者日本語教師を対象とした教師研修の中で、「ひきだすにほんご」を用いた授業を実施している。授業は、「ひきだすにほんご」の特徴や概要を知り、活用法を考えることを目的とした「教授法」の授業と、「ひきだすにほんご」を教材として活用してコミュニケーション能力の向上や日本の社会、文化に対する知識の深化を目的とした「日本語」の授業とに分けられる。それぞれの授業で得られた研修参加者からのコメントを抜粋して以下に紹介する<sup>(14)</sup>。

表5 研修参加者の「ひきだすにほんご」に対するコメント（誤字、脱字は訂正）

<p><u>「教授法」授業でのコメント</u></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・面白くて短いビデオで日本事情や日本での職場の場面などを伝えることができました。これからの授業カリキュラムに追加する予定です。</li><li>・いい教材だと思います。ドラマを楽しみながら、勉強できます。</li><li>・とても面白かった。学生は楽しく日本語を勉強できると思います。</li><li>・文化／日本事情のクラスに「ひきだすにほんご」を使うと非常に役に立つと思います。</li><li>・オノマトペや日常生活でよく使う表現単語が学習者には難しいらしく、なかなか覚えられない学習者も多かったです。しかし、この「ひきだすにほんご」はテレビドラマ式で見ても飽きなく、覚えやすい内容でしたので今後使ってみたいと思います。</li><li>・現代的で今の時代に合う場面なので、とても役に立つと思います。</li><li>・「ひきだすにほんご」はコミュニケーション課題や解決方法があって、日常生活の言葉もでてきて、本当におもしろいです。帰国後ぜったいに使います。</li><li>・日本で生活する人と就労者にとって役に立つ。来日前に見ておいたら便利ですね。</li></ul>
<p><u>「日本語」授業でのコメント</u></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・新しい日本語の勉強法を学びました。たのしくておもしろい動画だと思います。役に立つと思います。</li><li>・「ひきだすにほんご」のことを知ることができてよかったです。これから自分の授業でもつかいたいと思っています。</li><li>・ドラマは楽しくていろいろな役に立つと思うストラテジーを習いました。</li><li>・とてもよかったです。新しい日本語の勉強にもなりました。あと、国に帰ったら自分で使ってB1のクラスに教えられる教材ができました。</li><li>・「ひきだすにほんご」の動画が面白くて、日本語を勉強している人に役立つと思います。</li></ul>

このように、研修参加者からは「ひきだすにほんご」に対して好意的な評価が得られ、特に、面白く、実践的で役に立つ内容が評価されていることがわかる。「日本語」の授業の参加者からも、授業を通して「ひきだすにほんご」に触れたことで、自分でも授業で使ってみたいと感じたという声があり、教師として新しい映像教材に刺激を受けたことがうかがえる。

さらに、SNS やこれまでに実施してきたセミナー等を通じて、日本語母語話者からも実践的な内容に対する好意的な評価が聞かれ、それに加えて、「日本人にも役に立つ」「日本語母語話者にも見てほしい」という感想もあった。

以上のことから、3.1で述べた開発方針である「継続して視聴するモチベーションにつながるよう見て楽しめるコンテンツとすること」、「コミュニケーション能力の向上だけでなく、社会、文化についても学べるものにする」、「日本語学習者だけではなく、日本語母語話者にとっても見る価値のあるものにする」という3点が番組の中でうまく機能し、それが「ひきだすにほんご」の魅力につながっていることがわかる。

## 6. おわりに

「ひきだすにほんご」は現在、NHK ワールドでの放送に加え、メキシコ、インド、キルギス等計7カ国<sup>(15)</sup>、9社の放送局で現地放送されているほか、ベトナム、ジャマイカ、コスタリカ等7カ国で放送が予定されている。コンテンツライブラリーでは、動画視聴に加え、ダウンロード可能な関連コンテンツの充実や世界各地で行われている「ひきだすにほんご」を活用した教育実践例を紹介するなど、「ひきだすにほんご」を授業で活用するためのコンテンツ公開を続けている。世界各地より寄せられる実践例からは、学習者が「ひきだすにほんご」を用いた学習を楽しんでいるだけでなく、戦略に基づく学習を通して自身のコミュニケーション行動に自覚的になる様子が見られる。文化的トピックのディスカッションツールとしても有効に活用されているようである。引き続き、「ひきだすにほんご」が世界各地で広く視聴され、教室実践で有効に活用してもらえるよう、実践例の追加やセミナー等での広報に努めたい。

在留資格「特定技能」の創設を一つのきっかけとして、日本社会は外国人の受け入れを加速度的に進めている。スアンや津々浦々のセンパイたちのように、日本社会を支え活躍する外国人は今後も増加していくことが予想される。3.1で述べたように、「ひきだすにほんご」は日本語学習者に限らず、日本語母語話者にも視聴してもらうことを想定して作られている。さまざまな文化的背景を持った人たちがともに生きる社会において、お互いがどう関わることができるかを考えるためのツールとしても、「ひきだすにほんご」が活用されることを期待している。今後は、地域日本語教育の現場等でも視聴、活用してもらえるよう、働きかけを行っていききたい。

〔注〕

- (1) 番組視聴ページ<<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/ondemand/program/video/activateyourjapanese/?type=tvEpisode&>> (2024年1月17日)
- (2) コンテンツライブラリー<<https://www.hikidasu.jp/go.jp/>> (2023年8月30日)
- (3) JF 日本語教育スタンダードでは、ストラテジーは「方略」とされている。そのため、本稿では「ストラテジー」と「方略」の両方の用語を使用するが、同じものを指していると考えられる。
- (4) 厚生労働省によると外国人就労者数は2022年10月末現在、1,822,725人で、届け出が義務化された平成19年以降、過去最高を更新している。<[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_30367.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_30367.html)> (2023年8月30日)
- (5) 平成30年12月25日外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議決定<<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/gaikokujinzai/index.html>> (2023年8月30日)
- (6) JF 生活日本語 Can-do<[https://www.jp.go.jp/j/urawa/j\\_rsrcs/seikatsu.html](https://www.jp.go.jp/j/urawa/j_rsrcs/seikatsu.html)> (2023年8月30日)
- (7) 『いろいろ 生活の日本語』<<https://www.irodori.jp/go.jp/>> (2023年8月30日)
- (8) CEFR CV (p.35) では、コミュニケーション・ストラテジーをコミュニケーション言語能力とコミュニケーション言語活動の間の「蝶番のようなもの (a kind of hinge)」と表現している。
- (9) 第1回と24回に含まれなかったミニコーナーとドキュメンタリー映像は、コンテンツライブラリーで視聴することができる。
- (10) 取り上げたストラテジー一覧はコンテンツライブラリーの関連コンテンツ内ダウンロードコンテンツ一覧にある「内容一覧」で確認できる。
- (11) カテゴリーの和訳についてはJFスタンダードのものを使用した。また、仲介については開発者らで訳した。
- (12) 第20回では「ふわふわ」、「とろーり」、「サクサク」、「じゅわー」、第21回では「パリパリ」、「シャリシャリ」、「もちもち」、「ぷるぷる」を取り上げた。
- (13) ケルン日本文化会館、トロント日本文化センター主催の教師研修会、パリ日本文化会館、ベトナムのKAIZEN 吉田スクールにおける日本語の授業などで「ひきだすにほんご」が取り上げられており、これらの動画やレポートはコンテンツライブラリーで閲覧可能である。
- (14) 「教授法」授業に対するコメントは「2022年度特定技能制度による来日希望者のための日本語教授法訪日研修 (第1回～第3回)」の研修終了時に実施したアンケートから引用した。なお、同研修の参加者のレベルは、おおむねJFスタンダードB1以上である。また、「日本語」授業に関しては、「2022年度海外日本語教師基礎研修」のJFスタンダードA2レベルの定着が目標のクラスと、B1レベルの定着が目標のクラスにおいて授業を実施し、コメントは研修終了時に行ったアンケートから引用した。
- (15) 現地放送が行われたのはメキシコ (3社)、インド、キルギス、パラオ、ニカラグア、フィジー、パプアニューギニアの計7カ国9社、放送が予定されているのはベトナム、ジャマイカ、コスタリカ、ウルグアイ、チリ、トリニダード・トバゴ、エクアドルの計7カ国である (2023年9月現在)。

〔参考文献〕

- ヴェイゴツキー, L. S. (2001) 『新訳版 思考と言語』 柴田義松 (訳)、新読書社
- 菊岡由夏・築島史恵・山本実佳・岩本雅子 (2021) 「日本で就労・生活している人たちの『生の声』を聞くインタビュー活動ー『特定技能制度による来日希望者のための日本語教授法研修』における試みー」『日本語教育学会2021年度秋季大会予稿集』、255-260
- 国際交流基金 (2017) 『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』、国際交流基金
- 椿由紀子 (2010) 「コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」教育ー実際場面で使用できる「聞き返し」をめざしてー」『日本語教育』147、97-111
- 藤長かおる・斎藤誠 (2015) 「B1レベルの対話能力養成のためのストラテジー指導ー『まるごと中級 (B1)』の開発をめぐるー」『ヨーロッパ日本語教育』20、183-188
- 李賢珍 (2006) 「コミュニケーション方略の明示的指導が学習者同士の学習活動に与える効果ー韓国日本語学習者 (JFL) を対象にー」『日本学報』69、83-97

- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1, pp. 1-47. Oxford: Oxford University Press.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge <<https://rm.coe.int/1680459f97>> (2023年 8 月18日)
- Council of Europe (2020). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment Companion Volume*. <<https://rm.coe.int/16809ea0d4>> (2023年 8 月30日)
- Lantolf, J.P., Poehner, M.E. & Thorne, S.L. (2020). Sociocultural Theory and L2 Development. In VanPatten, B., Keating, G. D., and Wulff, S. (eds). *Theories in Second Language Acquisition*, pp. 223-247. New York: Routledge.
- North, B. (2000). *The Development of a Common Framework Scale of Language Proficiency*. New York: Peter Lang.



■ 英文要旨

Development and feedback on the strategy-based Japanese language learning program “ひきだすにほんご Activate Your Japanese!”

KIKUOKA Yuka, ISHIYAMA Tomoyuki, HONDA Masami

This paper discusses the background of the development, design, and feedback obtained through the use of “ひきだすにほんご Activate Your Japanese!”, which was released in 2022, with a focus on its main segment, “Xuan Tackles Japan!”. The main segment is unique in that it sets communication strategies as its learning items. Strategies were defined with reference to the concept of the Common European Framework of Reference (CEFR), and the selection of strategies was also based on the CEFR illustrative descriptor scales for strategies. The content is structured in such a way that the viewer can understand the sequence of using strategies based on the CEFR concept, i.e., recognizing a problem, and considering and implementing a strategy to overcome the problem. In addition, the outline of the development of two subsegments, “ONOMATOPOEIA—Share Feelings—”, and “Welcome to My Japan!” is also discussed.

■ 執筆者

菊岡由夏 国際交流基金日本語国際センター専任講師

石山友之 国際交流基金日本語国際センター専任講師

本田雅美 国際交流基金日本語国際センター専任講師